

千里山の思い出

三十一回生 杉山 秀子

私達が「団塊の世代」と呼ばれるようになったのは何年頃からだろう？

堺屋太一が命名し、昭和22年〜24年頃までに生まれた世代が「団塊の世代」と呼ばれた。

欧米ではBaby boomerと言われている。

第二次世界大戦が終わり、私達が生まれた。

「戦争を知らない子供達」である。

私の父も、第三期海軍予備学生として大学を繰上げ卒業し戦線へと向かった。

昭和18年9月に横須賀で訓練を受け、呉鎮守府、大分航空隊を経て鹿児島海軍航空隊串良基地で終戦を迎えた。その時、中尉だった父は隊の解散命令の後、終戦処理と復員事務を行い、焼け野原になった各地を見ながら復員した。

「本当に運がよかった！」と父が言う。今年90歳になった父は、自分の人生を振り返って最近よくその頃の話をする。

両親のケアマネージャーが鹿児島のご出身のせい

もあるのだと思うが、若かりし日の自分を思い出すの
だろう・・・。
65年以上前の話なのに鮮明に覚えているのに驚
いてしまう。

そして昭和22年に私が生まれた。カッコ良く今風に「Dジェネ」と呼ぼう！なんて言う人もいるが・・・
何てことはない、「D」は団塊の世代の「D」である。
「Xジェネ」はベトナム戦争後に生まれた「しらけ世代」。

「Yジェネ」は1975年以降に生まれ、大人になった頃にはバブルが終わっていた世代。

「Cジェネ」はコンピューターやコネクトなどの頭文字を取った今の世代を表している。

ベビーブームの私たちは1947年から3年間で800万人も生まれたのだ。今年65歳になる私達は、何事も「人と同じでは人数が多いから埋もれてしまおう」と言われユニークなキャラで活躍したり、下の世代からは「目の上のたんこぶ扱い」もされてきた。

千里第二小学校は、「雪」「星」「月」「花」「松」「竹」

「梅」の7クラスあった。その話をするに「ワーツ、宝塚みたいだね！」と皆に言われる。誰が名付けたのだろうか？

私は3年生の時に父の転勤で千二小に転校した。その時は星組だった。

大阪弁が判らない為に、授業についていけなくて苦労したものだ。

その頃の千里山は、団地が建設途中で山肌が露わな傾斜面があり、我が家では「ペタンコ山の櫛遊び」と称して、弟達は泥んこになって斜面を滑って遊んでいた。

山の斜面を板切れで滑り降りるのだ。日曜日には父まで一緒に砂スキーをして楽しんだ。

帰って来るとズボンの中まで砂だらけ・・・、いつも母に叱られていた。

父も母も30代で若く、ドッジボールをしたりバトミントンをしたり、いつも一緒に遊んでいた。

また、父は釣りが好きで日曜日は朝から近くの池に私達を連れて行った。お昼頃になると母がお弁当を持

ってきて・・・長閑な日々であった。

別の日曜日には、母が作った弁当持参で服部緑地辺りまで散歩したり、千里山ならではの時間を過ごした。

パソコンも携帯電話も無い時代、テレビとラジオが唯一の娯楽である。私は、毎日「少年探偵団」のラジオを聞くのが楽しみで、江戸川乱歩の「怪人二十面相」シリーズが大好きだった。

「ぼ、ぼ、僕らは少年探偵団、勇氣凛々瑠璃の色、望みに燃える呼び声は朝焼け空にこだまする、ぼ、ぼ、僕らは少年探偵団」の歌が始まるとラジオに齧りついたものだ。

私達が4年生になる頃には団地が完成し、学校までの近道と称して団地の中のアスファルト道を通って通学していた。団地の中の坂道を通り抜けて行くと、10分ぐらい短縮になっただろうか？

帰りはいつも給水塔の辺りで道草をくって帰ってきたものだ。

小学校4年から6年までは月組で、クラス替えも無

く、担任の大前美佐子先生も同じで、大阪弁もペラペラになり楽しい3年間をすごした。

大前先生が団地に引っ越していらしたので、先生のお宅にも遊びに行ったが、3DKの間取りで洋式水洗トイレが珍しかったのを覚えている。

私達が6年生の時に校歌が制定された。新講堂での発表会の際、ピアノの伴奏の他にアコーディオンも入れようと音楽の木島先生が提案されて、私が受け持つことになった。

毎日、昼休みに木島先生の部屋で練習した。始めて弾くアコーディオンは左手の和音ボタンが難しかった。

私は給食の脱脂粉乳が大の苦手だった。毎日、先生の目を盗んでトイレに捨てていた。

また、嫌いなおかずはコッペパンに挟んでこっそり持ち帰った。好き嫌いが多かった私は、給食の時間になると憂鬱だった……。

千里山には父が東京に転勤になるまで10年間住

んでいた。とても懐かしい思い出ばかりで、今でも大切にしている。

先日、新橋で同窓会があり小学校、中学校、高校の友達と会った。千里第二小学校からの仲良し組で、50年以上も経つのに会うと昔のままの私達に戻るのが不思議である。かけがえの無い友達だ。

私達「団塊の世代」は、入学試験、就職試験はもちろんのこと結婚する時も大変だと言われ続けてきた。それが終わった今は、「自分の時間を大切に、楽しく生きよう！」と心から思う。